

Title	古典教材としての『桃太郎』 - 古典学習導入時期の教材としての可能性 -
Author(s)	雲岡, 梓
Citation	国語論集, 13: 31-40
Issue Date	2016-03
URL	http://s-ir.sap.hokkyodai.ac.jp/dspace/handle/123456789/7961
Rights	

古典教材としての『桃太郎』

—古典学習導入時期の教材としての可能性—

雲岡 梓

一、はじめに

『桃太郎』は日本の代表的な昔話であり、桃から生まれた桃太郎が、犬・猿・雉を連れて鬼ヶ島に鬼退治に行くという内容である。その成立は室町時代にまで遡るが、文献として残るものでは、江戸時代初期のものが最も古い。『桃太郎』は享保年間（一七一六～一七三六）年に赤本『桃太郎』が出版され、続いて黄表紙、合巻に取り入れられて流布し、明治になっておとぎ話として書き直された。明治以降は検定教科書、国定教科書にも登場し、広く影響を持つようになった。

しかし、現在の国語教科書においては、東京書籍『新しい国語』一下（二〇一五年七月）の中の「ほんはともだち」、「むかしはなしをたのしもう」、「おはなしをつくろう」などの単元で題名や冒頭部が紹介されている程度である。「昔話」という枠の中で簡単に紹介されるのみで、『桃太郎』本文を用いての古文読解は行われていない。

本稿では、歴史の中で長く読み継がれ、日本人となじみ深い

『桃太郎』の、古典教材としての利用方法について考察する。

二、『桃太郎』の歴史

桃太郎は江戸時代において、まず赤本の形式で刊行された。赤本は江戸時代の草双紙の一種。延宝（一六七三）ごろから享保（一七三六）ごろにかけて流行した表紙の赤い子供向けの絵本のことである。絵が中心で平仮名の文を説明風に添えた素朴な絵本で、『桃太郎』『さるかに合戦』『舌切り雀』などのおとぎ話を題材にする。

この赤本の形式で刊行された『桃太郎』は、江戸時代において様々な形式・内容で次々と刊行され続けた。滑川道夫氏が

草双紙類の「桃太郎噺」は、いまわかっているものだけで八十編以上にのぼり、明和・安永・天明期（一七六四～一七八九）をピークに、元禄から幕末・明治初期にまでおよんでいるといわれている。それには、他噺と複合して造形

されたものや「桃太郎後日譚」のような物語もあるが、今日伝承の昔噺桃太郎は、ほとんど草双紙類（赤本―合巻）に変容されながら文字かされている。

と述べるように、江戸時代から明治にかけて八十種類以上もの『桃太郎』関係の書籍が出版されている（1）。

このように、江戸時代の間子供から大人にまで愛され続けた『桃太郎』は、明治になって教科書教材として使用されるようになる。滑川氏の調査によると、尋常小学校用の読み書きの教科書、『尋常小学校読本』（文部省編輯局著作、明治二十年刊）に掲載されたのが初出である。この時『桃太郎』が教科書に採用された理由について、滑川氏は次のように考察している。

昔噺は、「意義の解し易い」ものと思われるということ
は、当然のことではあるが、当時もまだ「祖父母の物語」として家庭生活にあつて伝承されていたから、なじみやすくまた、わかりやすいという通念が形成されていたのである。（略）小学校一年生の教材としたのは、この時点で「桃太郎噺」は、幼児期の子どもに語り聞かせる昔噺としておこなわれていたことを示している。

『桃太郎』は、なじみやすさ、わかりやすさによって、小学

校教材に選定されたのである。そして『桃太郎』は大正・昭和期にも引き続き教科書の定番教材であり続けた。しかし『桃太郎』はその後数奇な運命を辿る。滑川氏が

日清・日露戦争の前後は特に桃太郎噺を日本の海外発展の思想と結びつける傾向が強かった。日本が開国して、諸外国を見渡したとき、すでに世界は植民地分割を終了していた後であった。にもかかわらず海外遠征によって島国日本の領土を拡張しなければ、先進諸国に列することができないという考え方が何の疑いもなくおこなわれ、立志少年の情熱を、夢をおおる方向に結びつけた。桃太郎も、そうした海外遠征志向に結びつくわけである。

と述べるように、『桃太郎』を侵略戦争の象徴とする考え方が生じたのである。『桃太郎』の鬼退治が、戦時中には鬼（異民族）を倒し、鬼ヶ島（領土）を侵略する物語として、侵略戦争を正当化する目的で利用されて行つた。第二次世界大戦期においては戦意高揚のために、回天と思しき飛行機に乗って敵地に出陣する桃太郎のポスターが作成され、さらに、桃太郎が空襲部隊の戦闘機に乗って鬼ヶ島（ハワイ）の軍港（真珠湾）を奇襲するという、真珠湾攻撃を桃太郎の鬼ヶ島征伐に擬した漫画映画、「桃太郎の海鷲」まで作成されていた（2）。このように侵略戦

争の旗印として用いられた経緯があるため、『桃太郎』は戦後の教科書から姿を消してしまったのである。

三、『桃太郎』の教材的価値

前述のように負の歴史をも背負う『桃太郎』であるが、室町時代以降、長く語り継がれ、読み続けられてきた歴史があり、児童生徒にとっても昔話としてなじみ深い作品である。小学校高学年、及び、中学校低学年の古典導入段階において、補助教材として用いるのに最適であろう。現行の「小学校学習指導要領国語編」（平成二〇年告示、平成二七年一部改正）の「第五学年及び第六学年」の項目には、次の記載がある。

〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕

- (1) 「A話すこと・聞くこと」、「B書くこと」及び「C読むこと」の指導を通して、次の事項について指導する。

ア 伝統的な言語文化に関する事項

- (ア) 親しみやすい古文や漢文、近代以降の文語調の文章について、内容の大体を知り、音読すること。
- (イ) 古典について解説した文章を読み、昔の人のものの方や感じ方を知ること。

この(ア)に記述される「親しみやすい古文」に、『桃太郎』

はまさに合致するだろう。

また、古典文学に対して「難解なもの」「つまらないもの」といった苦手意識を抱く生徒は少なくない。そこで『桃太郎』のような既知の昔話を教材とすることによって、古典学習に対する親しみを持たせ、敷居を低くすることは有効である。そこで、平易な古文で綴られる赤本『桃太郎昔語』（作者・刊行年不明、安永六年再版）を教材として用いることを提案したい。本書を古典導入段階の教材として用いる意義をまとめると、以下の通りである。

- ① 現代の昔話『桃太郎』とほぼ同内容であり、話を理解しやすい。
- ② 古文が平明であり、暗唱や現代語訳をしやすい。
- ③ 挿絵が豊富なため、絵によって学習者の興味を喚起することができるとができる。

なお、この『桃太郎』を用いての授業は古典の理解を助けるための補助的な授業と位置付け、全一時間、もしくは全二時間で行う。中学校では「昔話を用いた古典学習」として、同じく昔話『かぐや姫』でなじみのある『竹取物語』の学習と関連付け、『竹取物語』の単元の最後の一時間を『桃太郎』の学習にあてても良いだろう。

以下、本書を用いた授業方法について考察して行く。なお、本稿における赤本『桃太郎昔語』の本文引用、挿絵の引用は、全て叢の会編『江戸の子どもの本——赤本と寺子屋の世界——』（笠間書院、二〇〇六年四月）に拠る。同書の使用する底本は、都立中央図書館加賀文庫所蔵本。西村重信画である。

四、赤本『桃太郎昔語』を用いた取り組み

授業の目的を、「赤本『桃太郎昔語』によって古典と現代文学の連続性を認識させ、古典学習に関する興味・関心を喚起すること」と設定し、次に挙げる方法によって授業を進める。

小学校高学年

- ① 現代の絵本『桃太郎』と赤本『桃太郎昔語』をプリントで配布し、赤本『桃太郎昔語』を音読する。
- ② 赤本『桃太郎昔語』の絵を見て、現代の『桃太郎』と異なっている箇所を探させる。
- ③ 異なっている箇所の本文を現代の『桃太郎』と比較する。

中学校低学年

- ① 現代の絵本『桃太郎』と赤本『桃太郎昔語』をプリントで配布し、赤本『桃太郎昔語』を音読する。
- ② 本文と挿絵の両方を手掛かりに、両者の共通点・相違点を

探させる。

- ③ 赤本『桃太郎昔語』を現代語訳する。

小学校高学年は挿絵を、中学校低学年は本文を中心として、現代の絵本『桃太郎』と赤本『桃太郎昔語』との比較によって授業を進めて行く。

昔話『桃太郎』と赤本『桃太郎昔語』を比較すると、その冒頭部において両者は類似性が高いことが確認できる。

爺は山へ草刈に。

（爺）「今日はいかふのどかな日じや。そろそろ宿へ帰りましょ。婆が待つててある。」

（婆）「もう一つ流れてこい。爺に進じよ。さてさて、ふしぎな桃じや。」

水の流れと人の果報は、さりととはさりととは知れぬものじや。
（赤本『桃太郎昔語』）

赤本『桃太郎昔語』は、このような書き出しで始まる。この場面の挿絵が〈図一〉である。爺が山へ草刈りに行き、婆が川で桃を拾う、というお馴染みのストーリーが、平明な古文で示されている。この場面は、次に引く現代の絵本『桃太郎』（3）において次のように記される。

むかし、あるところに、おじいさんとおばあさんがすんでいました。おじいさんはやまへしばかりに、おばあさんはかわへせんたくにゆきました。あるひ、おばあさんがかわでせんたくをしていると、かわから、ももがつんぶくかんぶくつんぶくかんぶくとながれてきました。おばあさんがひろってたべてみると、なんとともかともおいしいももでした。「なんともうまいももつこだ。おじいさんにも、もつてあげたいが・・・」そうおもって、おばあさんが、「うまいももつこ、こつちやこい。にーがいももつこ、あつちやゆけ」というと、おおきいうまそうなももが、おばあさんのほうへながれてきました。「これはまたうまそうなももつこだ」と、おばあさんはひろってうちへもつてかえり、だいにしまいこんでおきました。

(松居直文・赤羽末吉画『ももたろう』)

両者を比較すると、全体として赤本『桃太郎昔語』の方が描写が簡略である。例えば、婆が川に洗濯に行ったことや、川から桃が流れて来たことは、本文には具体的に記述されていない。また、前掲の『ももたろう』(松居直文・赤羽末吉画)においては「つんぶくかんぶくつんぶくかんぶく」と表現され、あるいは「どんぶらこ、どんぶらこ」と表現される場合もある、現代の『桃太郎』でおなじみの桃が流れて来る際の擬音語も用いら

れていない。しかし(図一)の挿絵を見ると、左下に川を流れて来る桃が描かれ、中央には洗濯物の入った盥が置かれている。これによって、婆が川に洗濯に行つて、川を流れて来る桃を拾ったことが読者にわかるのである。



ところが次の場面において、赤本『桃太郎昔語』は現代の『桃太郎』とは異なった展開を見せる。

(手伝いの女1)「でかさしやつた。男の子じや、さてきて。」

(産婆)「この子は強い。をれが手をはねのけ申す。」

爺、若やぐ。

(爺)「うれしや、うれしや。桃がこのやうな子になった。

名は桃太郎とつけませう。」

婆、若やぎ、

(婆)「ああ、うれしうござんす。」

(手伝いの女2)「血心もなうておしあわせ。これ、湯をま

いれ。」

(手伝いの女3)「葉をちと進ぜましよ。」



ここに描かれているのは、現代の『桃太郎』には存在しない、婆が桃太郎を出産するシーンである。この場面の挿絵(図二)に注目すると、(図一)では老人の姿で描かれていた爺と婆が、ここでは「若やぎ」という言葉に示されるように、壮年の男女の姿で描かれている。川を流れて来た桃を食べた爺と婆が

桃の力によって若返り、子どもを儲け、月が満ちて婆が桃太郎を産出したというストーリーになっているのである。

このように、赤本『桃太郎昔語』は現代の『桃太郎』とは異なったストーリー展開を有する。このことについて、赤本『桃太郎昔語』の解説(4)には、次のように記される。

桃太郎の誕生には桃から生まれる果生譚と桃を食べて若返った爺婆から生まれる回春譚の二つがある。江戸期ではほとんどが回春譚で、江戸末期を過渡期として明治期以降は果生譚となった。この作品も果生譚で、出産場面が描かれている。

江戸から明治にかけて八十種類以上もの『桃太郎』が出版されたことは前述したが、大筋として桃から生まれた桃太郎が鬼退治に行くというあらすじに変わりはない。しかし、細部には差異が存在し、殊に桃太郎の誕生場面は果生譚と回春譚に分類される。果生譚とは、川を流れてきた桃の中から桃太郎が生まれるとするものである。回春譚の方は、桃を食べた爺婆が若返り、子供をもうけるとするものである。桃は中国の伝説上の仙果で、不老長寿の薬効を持ち、邪気を払う魔力を持つものとされているからであろう。赤本『桃太郎昔語』は回春譚、現代の『桃太郎』は果生譚である。

この他にも、赤本『桃太郎昔語』には、桃太郎が産まれてすぐに産婆の手をはねのけるという、桃太郎の力の強さを印象付ける記述が存在する。

さらに、赤本『桃太郎昔語』の次の場面においては、現代の『桃太郎』では描かれない、幼児期の桃太郎の逸話が記される。

桃太郎、力持ち。

(桃太郎)「こればかりに小石がなんの重たいものだ。若い衆、見さしつたか、受け取り手はないか。」

(若い衆)「てんとあきれはてた。このがきはたいていなことじゃない。つがもない、手にや負へない。」

この場面の挿絵(図三)には、幼少期の桃太郎が、自分の体ほどの大きさの巨石を軽々と持ち上げる様が描かれている。このように、赤本『桃太郎昔語』には、後の鬼退治を可能にする伏線として、桃太郎が並外れた怪力の持ち主であるという描写がたびたびなされているのである。



こうした赤本『桃太郎昔語』と現代の『桃太郎』との違いを児童に見付けさせ、指摘させることによって、古文の熟読を促し、教育効果が上げられるだろう。

また、**〔図四〕**の桃太郎とお供たちが鬼ヶ島の鬼の住処を探して旅をする場面の挿絵からは、赤本特有の犬・猿・雉の描き方が見て取れ、興味深い。江戸時代の赤本において、桃太郎の姿は鬘を結って着物を着た若者として描かれ、現代の絵本に描かれる姿と大差ない。しかし、現代の絵本では犬・猿・雉が一般的な動物の姿で描かれるのに対して、赤本では着物を着た人間の胴体に犬・猿・雉の顔が付いているという姿で描かれる。このような現代から見れば一風変わった挿絵も、学習者の興味を惹くために有効であろう。



さらに、桃太郎がついに鬼ヶ島に辿り着き、鬼と対峙する場面の挿絵**〔図五〕**では、当時の歌舞伎の流行を反映して、桃太郎が鬼に対して見得を切る姿が描かれる。「見得を切る」とは、歌舞伎で役者が感情の高揚などを表すために、一瞬動きを止め



図五

てにらむように目立つポーズを取ることである。このように、江戸時代の文化的流行を反映した挿絵が描かれている。

(桃太郎)「角をもいでやらう。」

(犬)「をらが旦那の腕にどうして勝つことはなるまい。」

(鬼)「あてこともない、しぶていやつらだ。」

この挿絵を示し、歌舞伎独特の動作であることを教えることで、伝統芸能の学習と関連づけることも可能であろう。このように挿絵部分も活用しながら、現代の『桃太郎』と赤本『桃太郎昔語』を比較し、冒頭部・桃太郎の誕生場面・桃太郎の幼児期・お供の犬猿雉の描写・鬼との戦いの場面と読み進めて行くことで、学習者が楽しみながら古典に馴染むことが可能となるだろう。

五、おわりに

本稿では、小学校高学年、及び、中学校低学年の古典学習導入期の補助教材として、『桃太郎』を用いることの意義を考察してきた。『桃太郎』は戦時中に国威高揚のために利用されてきた歴史があるため、戦後の教科書からは姿を消して久しい。しかしながら『桃太郎』は誰もが知っている有名な昔話であることから、古典学習導入期の教材として用いることによって、学習者の古典への興味を喚起し、理解を深めることができるのではないだろうか。

注

1 滑川道夫『桃太郎像の変容』（東京書籍、一九八一年三月）。以下、滑

川氏の引用は、全てこれに拠る。

2 前掲注（1）に拠る。

3 昔話『桃太郎』の引用は、松居直文・赤羽末吉画『ももたろう』（福音館書店、一九六五年二月）に拠る。なお、多数存在する『桃太郎』の絵本の中で特に本書を用いているのは、本書が東京書籍『あたらしいこくご』一下の中で紹介されているもので、児童生徒になじみがあると考えられるからである。

4 叢の会編『江戸の子どもの本 ―赤本と寺子屋の世界―』（笠間書院、二〇〇六年四月）

〔付記〕本稿は北海道教育大学釧路校国語科教育研究会主催「国語を学ぶ会」（於北海道教育大学釧路校）における口頭発表に基づく。席上で、教示下さいました諸先生方に心より感謝申し上げます。

本稿は平成二十七年北海道教育大学学長戦略経費（共同研究）の成果の一部である。

（くもおかあずさ／北海道教育大学専任講師）